

## クシヤンに於ける宗教の大衆化

——律蔵に於ける背の高い塔・二仏・團泥の意味するもの——

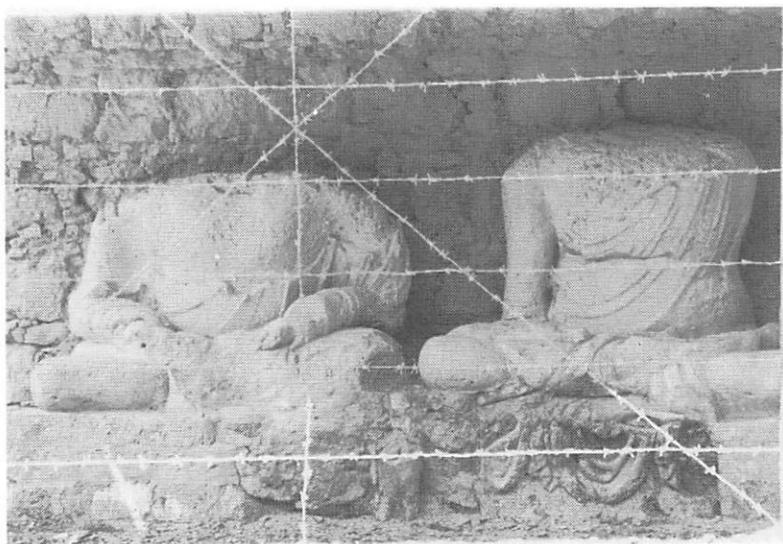
高 橋 堯 昭

### 1

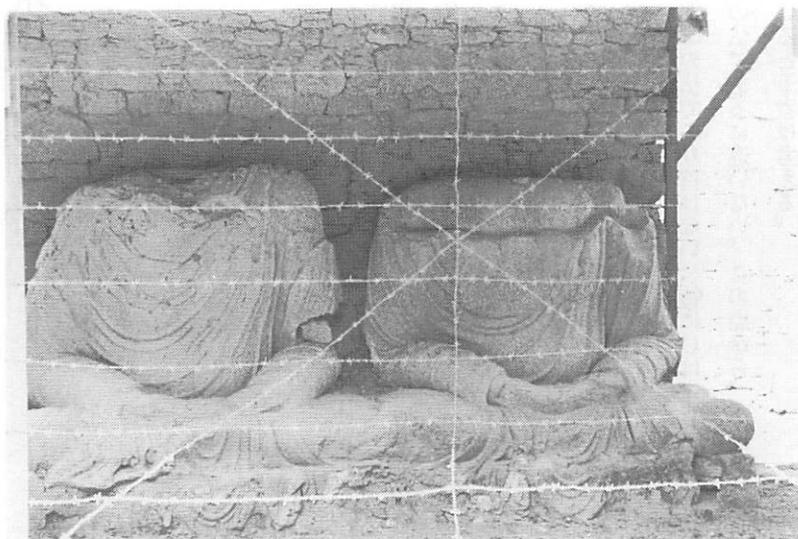
タキシラのモラモラドウ僧院に写真1・2・3の如き二仏並座像が三対現存している。然も又、かつては存在したであろうと思われるくずれた石の基壇が三つ程ある（写真5のX印参証）。共に部屋と部屋を仕切る石積み、いわば部屋の入口にある、最初は一仏であつて、後に一仏を加えたのではないのは、部屋と部屋の仕切りの石積みの巾からしてわかる。

基壇はBCは、同一基準、Aは基壇の高さが五センチ程向つて左の仏の方が低い、それ程差があるとは思えない。共にストッコ製の仏である。基壇はABC共二十センチ角の石を積んだ基壇の上にストッコをぬり、この上に二仏が作られている。仏像の芯は泥で表面はストッコである。共に禅定印の仏であり首はない。特にCは光背をもつた仏が数体基壇に彫られているから、この二仏はこれらの仏菩薩以上の仏であるに違いない。この点から、生身の仏陀以上の人物、即ち久遠の本仏等の如き超越者としての仏を表現していると筆者は考える。

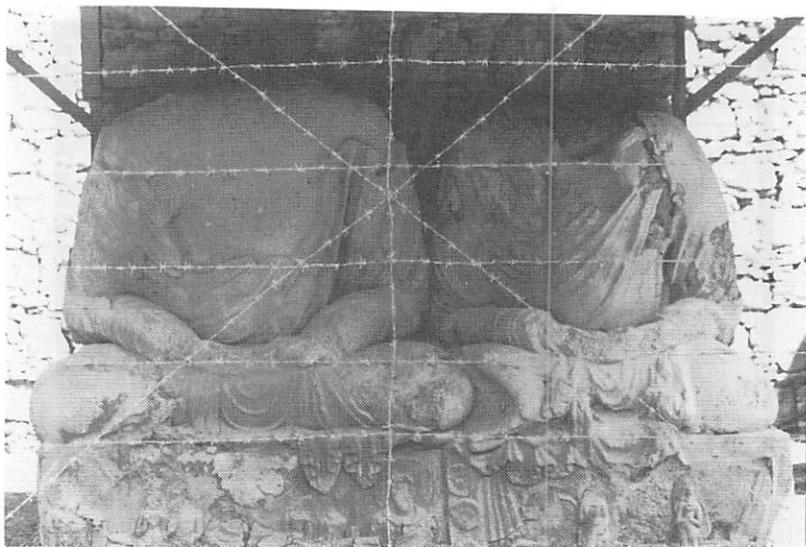
クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）



1. モラモラドウ二仏並座像A



2. モラモラドウ二仏並座像B

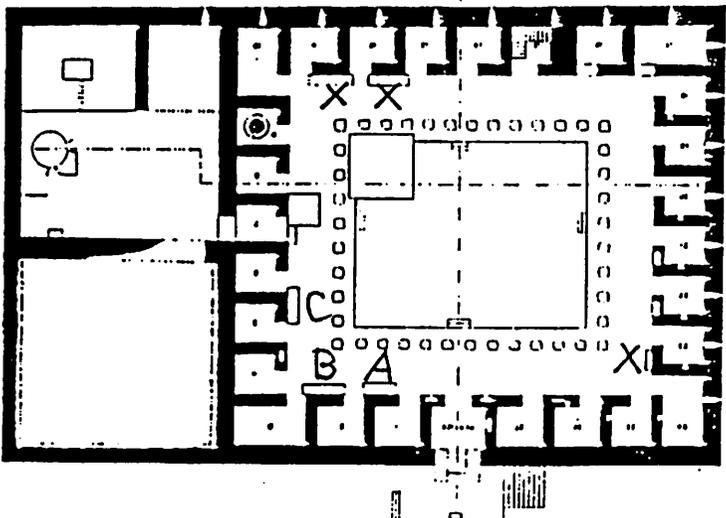


3. モラモラドウ二仏並座像C



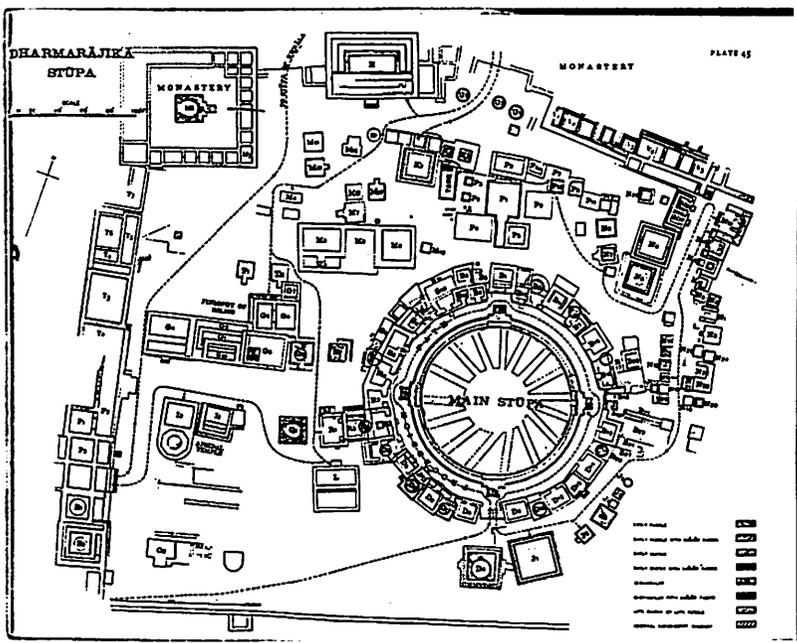
4. ダルマラージカ奉獻塔の二仏

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化(高橋)



5. モラモラドウ寺院

Xは基壇だけ



6. 繞道路(マールタルタキシラより)

.....線—繞道

このほかダルマラージカの大塔前、奉獻塔P1とP2との間、即ちP1側の壁に二仏(写真4参照)が見られる。三十センチ角の石を積んだ基壇にストッコの仏が並んでいる。基壇や背後の壁の石碁がとれて下の石が露出しているが、石積みによる年代測定のためにかえて便利である。

この二仏は奉獻塔P1の壁のスペースから見て、四仏であっても不思議はない。即ち二仏のほかに、その両側に猶夫々一仏を作る余裕はある。四仏の例はモラモラドウの大塔の基壇に作られていて、現在タキシラ博物館内に展示されている。然し、P1とP2の塔はどうしたわけか、平行ではなく、片方がつまっている。だから四仏だと繞道出来なくなってしまう。マーシャルは信者が日常繞道する參詣道を推定して、わざわざ点線をいれている(6参照)もし四仏ならば、その繞道の道がP1とP2の間を通れなくなる。従って、もともとから二仏であったことがわかる。

さて、これが法華經の釈迦多宝の二仏であるかどうか、これらの仏像はストッコといって泥と石膏造りである。ガンダーラでは二・三世紀の彫刻は黒色片岩を中心とする石製であるが、三世紀中頃ササンペルシャの侵入によって石製の製作活動は中止され、やがて四世紀末キタラクシヤンの侵入により、今度はこのストッコ製の仏像の全盛期を四・五世紀にむかえた。石製では製作日数と費用がかさむが、ストッコでは型を作って泥や石膏を入れ、後はヘラで顔を直せば異った仏像が沢山安直に出来るからで仏像製作の隆盛の需要に答えられるからである。

四・五世紀になると、ガンダーラは経済的にはカニシカやフヴィジカの如き昔日の面影はなくなって来たが、逆に造像活動は活発となって来た。為に安あがり沢山出来る型抜きの方法が考案され、仏像造立の活発化に拍車をかけるに至った。ヴィーマ・カドフィーセス以来ローマとの通商の活発化、カニシカ・フヴィジカの全盛期を過ぎたクシヤン朝では、経済的には衰退のの一路をたどるが、造像活動の隆盛化のため、費用の安くて大量生産の出来る方法が、

そのニーズに答えた。これがストッコの仏であったといえる。従ってストッコの仏は四・五世紀のものだし、法華經は一世紀には編纂されているといわれているから、これらの像は法華經のものといっても不自然ではない。それに玄奘は七世紀に旅した時、「タキシラはみな大乘」と述べている。従ってタキシラの小乗の寺々はいつしか大乘に変わって行ったのであろう。従って法華經の可能性は十分にある。即ち塔と僧伽の構造が律の規定に則って作られているこれらの寺々もいつしか大乘に変わって行ったと想像出来るからである。

特にダルマラージカは、もともと部派に属さない塔中心の寺であったし、（出土する碑銘は部派について言及していない）又、シルバースコロールとして有名な碑銘の中に「自分の菩薩堂の中に像を安置した」とあって、菩薩云々という言葉から大乘に近いと考えられるから、又後述の律威の大乘化？という点から類推してよけい法華經があったといっても、言い過ぎではあるまい。

2

そもそも二仏が經典に現れるのは、次のものがある。

別訳雜阿含經卷第六

爾時尊者摩訶迦葉。在於邊遠。草敷而住。衣被弊壞。染色變脫。鬚髮亦長。來詣仏所。時諸比丘。見迦葉已。皆生是念。彼尊者。不知出家所有威儀。衣色變穢。鬚髮亦長。威儀不具。爾時世尊。知諸比丘心之所念。為欲令彼生欽尚故。遙見迦葉。即語之言。善來迦葉。尋分半座。命令共坐。

爾時尊者摩訶迦葉。久住<sup>二</sup>舍衛國阿練若床坐<sup>一</sup>。長鬚髮著弊納衣<sup>二</sup>。來詣<sup>一</sup>所<sup>三</sup>。爾時世尊無數大衆圍繞說法。時諸比丘見<sup>二</sup>摩訶迦葉從<sup>レ</sup>遠而來<sup>一</sup>。見已於尊者摩訶迦葉所<sup>二</sup>。起<sup>レ</sup>輕慢心言<sup>一</sup>。此何等比丘。衣服鹿隨。無有<sup>二</sup>儀容<sup>一</sup>而來。衣服佯佯而來。爾時世尊知諸比丘心之所念<sup>一</sup>。告<sup>二</sup>摩訶迦葉<sup>一</sup>。善來迦葉於<sup>二</sup>此半座<sup>一</sup>。

中本起經卷<sup>下</sup>大迦葉如來品第十二

於是摩訶葉。垂髮弊衣。始來詣<sup>レ</sup>佛。世尊遙見<sup>レ</sup>歎言。善來迦葉。豫分半床。命令就<sup>レ</sup>座<sup>一</sup>。(傍線筆者)

これらは生身の釈尊と大迦葉との關係の物語である。即ち大迦葉が余りにもきたない法衣を着、髭ぼうぼう、垢だらけだったので、他の弟子達が小馬鹿にした。それを見た釈尊は自分の法衣を着せて、二人並んだという話。然しタキシラの二仏は前述の如く、Cの基壇に多くの仏菩薩が彫られているし、光背をもった仏も彫られているから、阿含経等の如き生身の釈迦や大迦葉ではない。それ以上の存在であることは間違いない。

然らば、ほかに二仏があるだろうか。私は律藏の中に二仏の話を数ヶ所見出した。共に共通な考え方である。即ち釈迦仏がコーサラ國を遊行して居られると、バラモンが耕作していた。そして彼は釈迦仏をみると、鋤<sup>す</sup>を畑に突き立てて釈迦仏を礼拝した。これを見て仏は微笑された。おそばにいた弟子達は不思議に思つて仏に問うと、仏は「彼は二仏を拜んだから」だと答えられた。猶「何の二仏か」と再び仏に問うと、「私と、私の杖の下にある迦葉の塔を拜んだから、二仏を拜んだことになる」と言われた。更にその迦葉仏の塔を拜みたいと懇願すると、比丘達に、「汝、このバラモンから土塊と、この地を求めよ」といわれた。バラモンから土塊とこの地を譲りうけると、「迦葉仏の七宝塔の高さ一由延、面広半由延なる」を仏は現出されたことである。そして「百千の黄金より、一団<sup>だん</sup>泥もて<sup>だん</sup>敬心にて仏塔を治せんには」とさとされたことである。黄金より、まごころがある時には七宝塔は現出するということである。即ち

(1) 摩訶僧祇律卷第三十三

塔法者。仏住拘薩羅國遊行。時有婆羅門耕地。見世尊行過。持牛杖住地礼仏。世尊見已便笑微笑。諸比丘白仏。何因緣笑。唯願欲聞。仏告諸比丘。是婆羅門今礼二世尊。諸比丘白仏言。何等二仏。仏告比丘。礼我当其杖下有迦葉仏塔。諸比丘白仏。願見迦葉仏塔。仏告比丘。汝從此婆羅門。索土塊并是地。諸比丘即便索之。時婆羅門便與之。得已爾時世尊即現出迦葉仏七宝塔。高一由旬。面広半由延。婆羅門見已即便白仏言。世尊。我姓迦葉。是我迦葉塔。爾時世尊即於彼処作迦葉仏塔。諸比丘白仏言。世尊。我得授泥不。仏言得授。即時説偈言

真金百千擔 持用行布施 不如一団泥 敬心治仏塔……………

人等百千金 持用行布施 不如一善心 恭敬礼仏塔……………

百千車真金 持用行布施 不如一善心 華香供養塔……………

百千閻浮提 滿中真金施 不如一法施 隨順令修行……………

百千世界中 滿中真金施 不如一法施 隨順見真諦<sup>◎</sup>

(2) 弥沙塞部和醯五分律卷第二十六

爾時國王用非法治政暴虐無道。夢見牛頭梅檀壳與腐草同伍者。爾時釈種沙門貧利養故與白衣説法。夢見水中中央濁四邊清者。爾時仏法中國先滅邊國反盛。仏言。王十一夢所為如此。於大王身無有不祥。王即於座上勸諸群臣。所欲祠天之物今悉施以無畏。吾從今寧自失命不敢殺生。況殺人乎。不敢傷虫蟻。況女及諸人等乎。仏告阿難。彼迦葉仏般泥洹後。共王為仏起金銀塔。縱廣半由旬高一由旬。累金銀整一一相間。今猶在地中。仏即出塔示諸四衆。迦葉仏全身舍利儼然如本。仏因此事取一搏泥。而説偈言。

雖得閻浮檀 百千金宝利 不如一團泥 為仏起塔廟

(3) 四分律卷五十二

爾時世尊在拘薩羅國。興二千二百五十比丘人間遊行。往都子婆羅門村到一異処。世尊笑。時阿難作是念。今世尊以何因緣笑耶。世尊不以無因緣而笑。偏露右肩脱革屣。右膝著地合掌白仏言。世尊。不以無因緣而笑。向者以何故而笑。願欲知之。仏告阿難。乃往過去世時。有迦葉仏。般涅槃已。時有翅毘伽尸國王。於此処七歲七月七日起大塔已。七歲七月七日興大供養。坐二部僧於象陰下。供第一飯。時去此処不遠。有二農夫耕田。仏往彼間。取一搏泥來置此処。而説偈言

設以二百千瓔珞	皆是閻浮檀金	不如以一搏泥	為仏起塔勝
設以金百千搏	皆是閻浮檀金	不如以一搏泥	為仏起塔勝
設以金百千擔	皆是閻浮檀金	不如以一搏泥	為仏起塔勝
設以金百千抱	皆是閻浮檀金	不如以一搏泥	為仏起塔勝
設以金百千壁	皆是閻浮檀金	不如以一搏泥	為仏起塔勝
設以金百千廠	皆是閻浮檀金	不如以一搏泥	為仏起塔勝
設以金百千山	皆是閻浮檀金	不如以一搏泥	為仏起塔勝
時諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷。皆以一搏泥著此処即成大塔			

(4) 根本説一切有部毘奈耶藥事卷第十二

是時世尊。告具壽阿難陀曰。汝來可詣都累迦城。聞教隨仏。至彼城所。有一婆羅門。而為耕墾。遙見世尊具三十

クシャンに於ける諸宗教の大衆化(高橋)

クシャンに於ける諸宗教の大衆化(高橋)

二大丈夫相。廣如余説。作如是念。我若往礼沙門喬答摩者。靡此事業。若不往礼。失諸福利。令事不麁。使獲福利。執鞭耕犁。遙言敬礼敬礼。仏告貝寿阿難陀。彼婆羅門。自招錯咎。而於此処。有迦攝波如来全身舍利。儼然無損。若来我所。恭敬礼拜。彼便致敬二仏世尊……………

仮令百千瞻部金 積聚奉持施一切 不如有人一淨心 翹動右邊於仏塔

是持復有一鄔波索迦。持泥置於舍利隱処。世尊為彼。亦説伽他曰

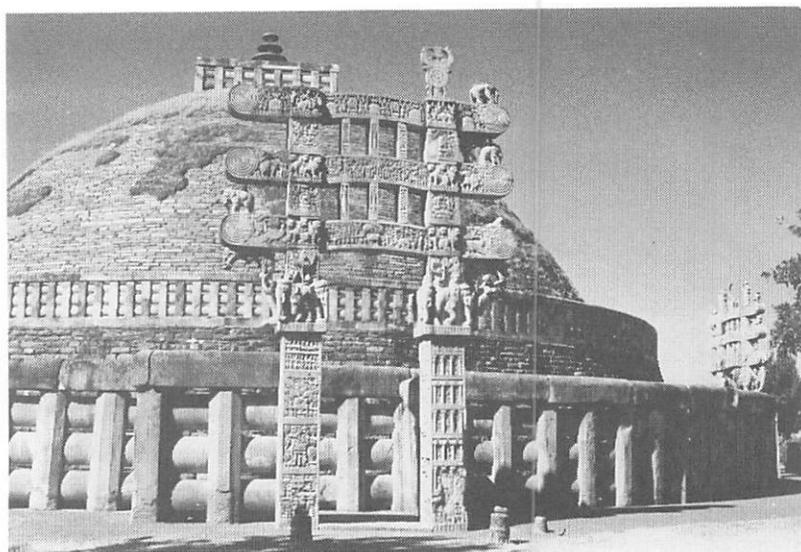
仮令百千瞻部金 恒以奉持施一切 不如有人一淨心 持泥置飾於仏塔

是時有百千人衆。聞此施泥福利。咸持泥置。或有持諸微妙花香。而散其中。仏亦為説頌曰

仮令百千瞻部金 恒以奉持施一切 不如有人一淨心 香花供養於仏塔(共ニ傍線筆者)

阿含の仏と律蔵の仏の違ふのは、そこに出場して来る仏は過去仏としての迦葉仏と、この世で悟つた後の仏としての釈迦仏。過去と現在の仏である。そして又この二仏は必ず「背の高い塔」と「泥団子」、即ち「真金百千の瞻部金、持し用いて布施を行せんに、しかじ一団泥もつて敬心にて仏塔を治せんには」とか、「人等の百千の金、持し用いて布施を行せんに、如かじ、一善心にて恭敬して仏塔を礼せんには」(摩訶僧祇律)、「閻浮檀の百千金宝の利を得ると雖も、一團泥にて仏の為に塔廟を起さんには如かじ」(前掲五分律二十六、大22—172下・173上上の文中)「仮令、百千の瞻部金もて、翹動して仏塔を右邊せんには」(前掲根本説一切有部業事卷十二・大24—153上中)の如く、黄金より泥団子即ちまごころの方がということが各律共に強調されている。

然もこの二仏はかく背の高い塔と泥団子が、ワンセットになっている所が注目すべき所である。私はこの「三者の一体」はこの律蔵の成立時の社会状況、宗教のあり方を示しているように思われてならない。

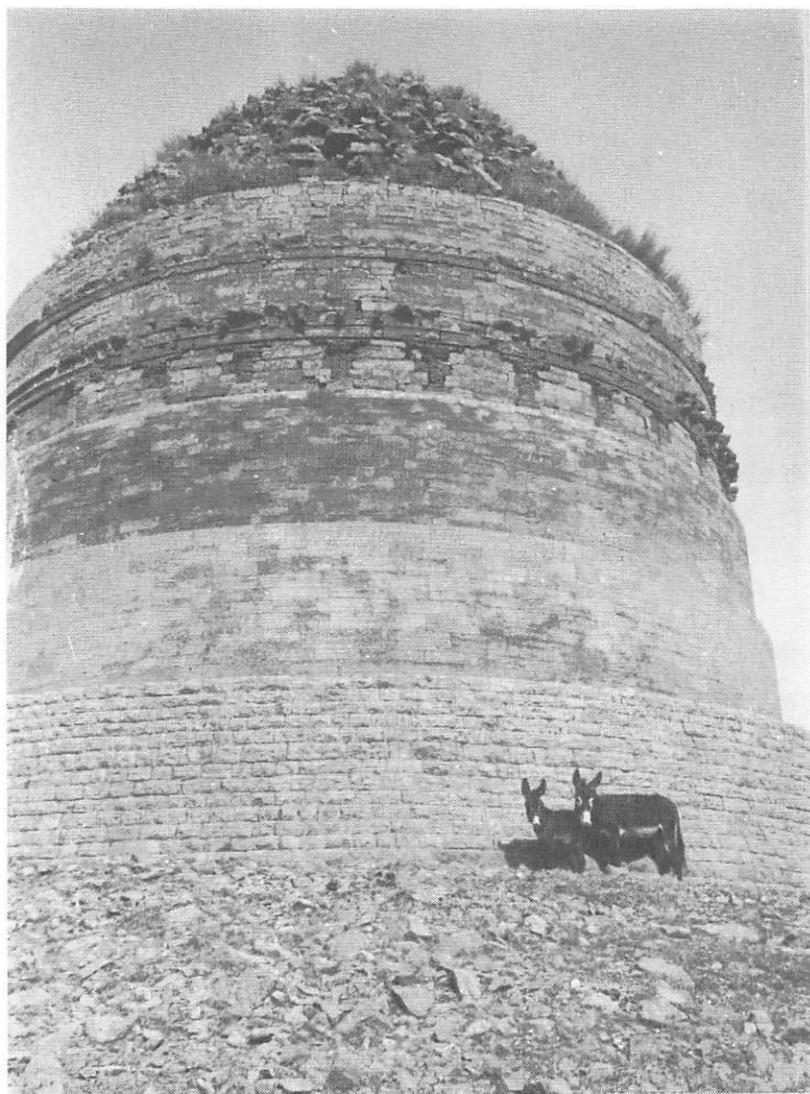


7、サンチー大塔

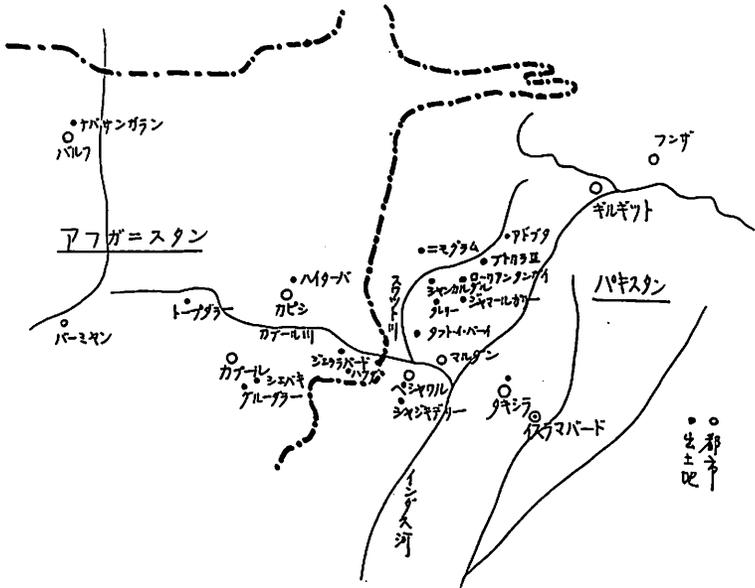
3

1、まず背の高い塔について、その分布はタキシラからスワット、そしてアフガニスタンに限られているから、この律蔵の話はこの背の高い塔のある場所西北インドがその舞台となっていると言えよう。インドの塔はサンチーの大塔で代表されるように背の低い土饅頭型のものである（写真7参照）。これに対して前記範囲の塔は砲弾型の塔身に何重もの円型基壇（写真8、参照）、そしてその下に四角な基壇（写真10、参照）がつけ加った背の高い宝塔で、特にジェララバードやシェバキ等、西に行く程高いとも言えよう。その範囲を图示すれば図9の如くとなる。強いて言えればクシヤンの勢力範囲となる。

筆者は塔の背が高くなるのは、仏を単なる人間釈尊以上に、即ち超越者救済者として仏陀を考える傾向にあった為と考えている。即ち、この範囲の地方に、ペルシャ等西方の「神は超越者」<sup>(1)</sup>という考え方があり、それに刺激され、



8. バラーの塔 円型基壇が三段



9. 背の高いストゥーパ及奉獻塔出土分布図

仏陀をも超越者として考える傾向があったと考えられている。勿も、人間存在の有限性、実存の自覚から、仏教自体の中に、仏身観の深化発達があったということは十分理解されるが、仏身観の発達した大乘仏教が西北インドで起った点から考えて、西方の考え方の刺戟は十分あったとも考えている。<sup>13)</sup>そして、こうした傾向が法華一乗、アミダ一尊、般若波羅密多は仏母という「一仏乗」思想となり、仏陀の墳墓をして、背の高い、或はサンチーのインド型でも、規模を巨大化(マンキヤラの大塔)して、仏陀を超人として表現するようになったとも考えている。

然もこうした超越性は、又無限性とも表裏する。即ち時間的に永遠に継続する仏の生命の無窮性と、その説かれた法の恒常性である。

これを表現する方法が、現在仏と過去仏の一致、法華経では「多宝如来と釈迦仏」の並座。律蔵では「過去仏の迦葉仏と現在仏の釈迦牟尼仏」の合一、



10. グルダラー塔

「二仏並座」の姿で表現される。従って仏の超越性を示す「背の高塔」と、仏及びその説かれた法の悠久性を示す「二仏並座」は二にして一であると考える。

然も「超越性と悠久性」とは客観的な外なる存在ではなく、あくまでも己心の一念三千の如く主体の側にある。「浄心」「まごころ」をもって仏を信じ崇める我々の心の中に体験顕現される。物や金という信仰ではなく、心からの信仰、即ち浄心である。これが、この世の中の全黄金よりも博泥即ち泥団子の方がという前記引用の律蔵の言葉となる。仏の超越性と悠久性は浄心の中に、即ち主体の奥底に一つとなって顕現されるものとこれらの諸律は主張していると筆者は思う。

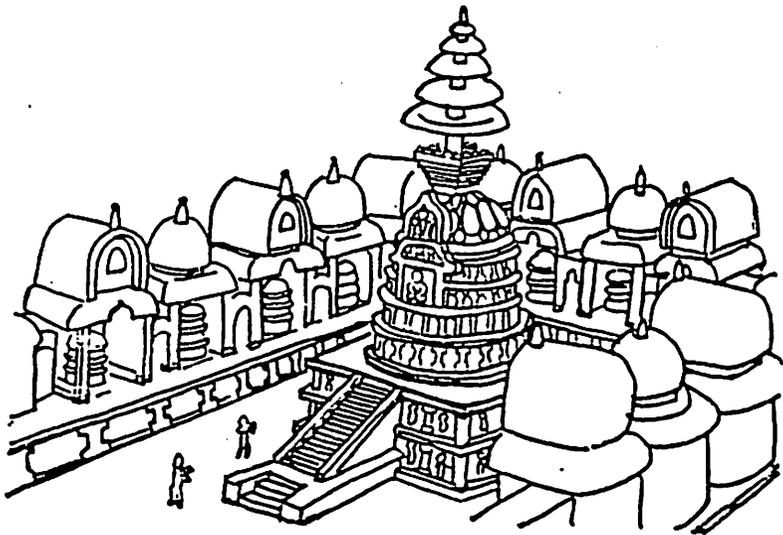
然して、こうした傾向は、造塔の隆盛とつらはらに、塔も建てられない庶民に光明を与えんとする当時の社会の要請に対応するものでもあった。それが一世紀から三・四世紀への思想的流れでもあった。いわば大乘はこうした思想の流れの一つの反映でもあったらう。

さて、これらの背の高い塔・二仏・團泥の出て来る律蔵の成立の時代性を示すものとして、

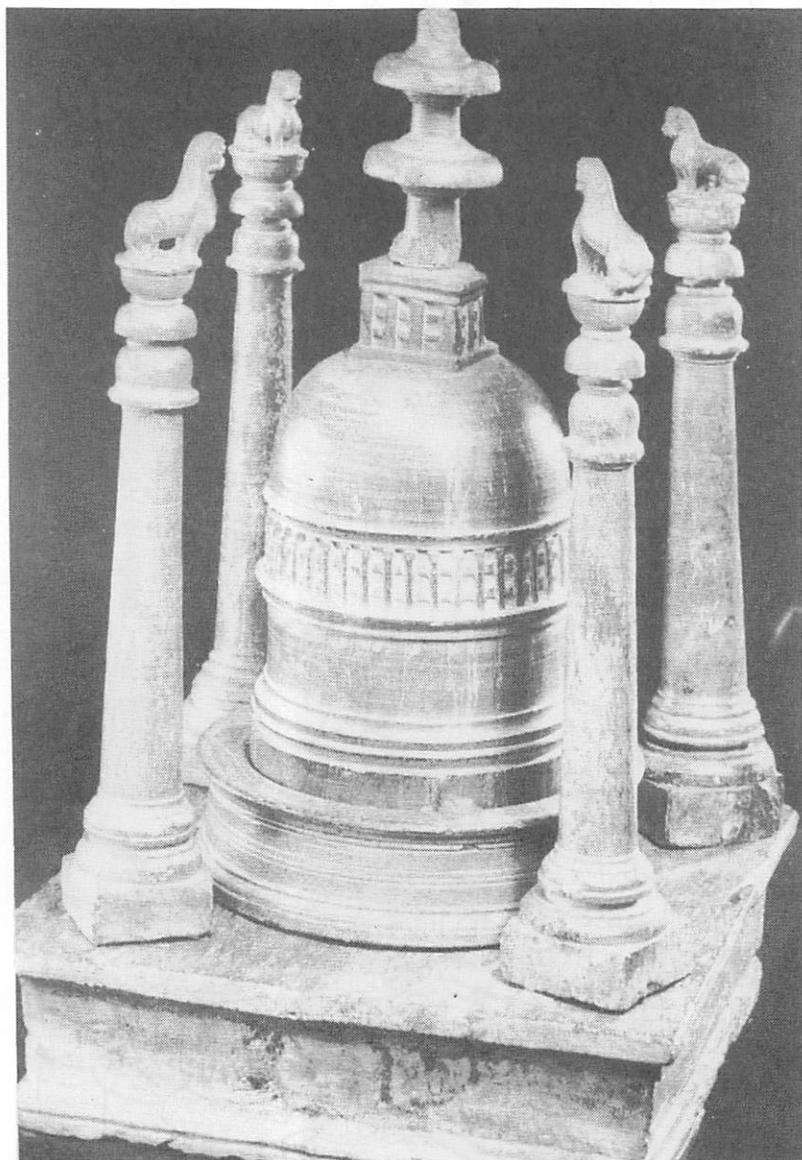
(1) 摩訶僧祇律(大四九七下―四九八上)に「作塔法有下基四方周匝欄楯。円起二重・方牙四出」とあることは大いに注目に値いする。サンチー、パールフットの欄楯で見ると、インドの塔は柵である欄楯は塔のまわりにあつたが、(前のサンチー大塔写真参照)ガンダーラに至ると欄楯は基壇の中に入り、仏像や仏伝図の区切りの柱となつてゐる。然もインドの塔はサンチーの如く円型基壇であるが、ガンダーラ以西ではこの円型基壇の下に四角(方形)の基壇が加わり(写真10、グルダラー塔参照)、この経文の如く「円基二重」の如く二段三段と重なり塔は砲弾型に背が高くなる(写真8・11参照)。だからこの律蔵の文はガンダーラの塔をさしてのことであると思ふ。

(2) 更に「方牙四出」というのは、筆者はカニシカ大塔

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化(高橋)



11. タフト・イーバーヒー僧院複元図(原図カラチ博)



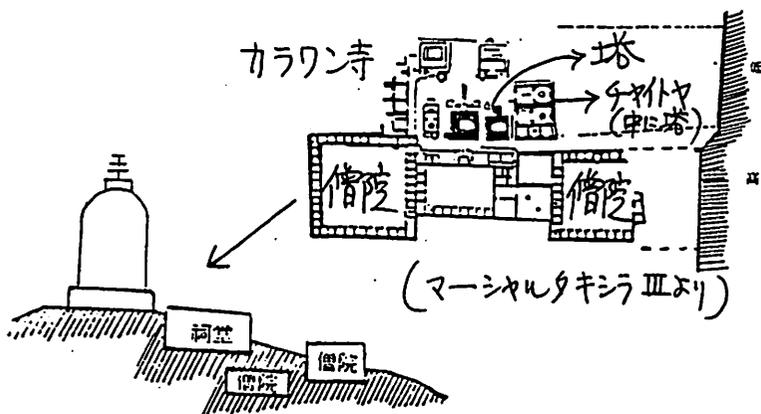
12. 方牙四出の見本（カニシカ大塔を模したと思われる）

を前提しているように思える。即ち大唐西域記によると「童子が砂で塔を作っていた。そして王に、いつか大王が来て塔を建てるであろうと言うと童子は消えてしまった。大王はここに塔を建てよとの仏の命令を感じ、早速ここに塔を建てることにした。そして塔を建て終ると思いきや、塔の四隅に四角の小塔がとび出した。これをおおうべく塔を増巾すると、又四隅に小塔がとび出す。これをくり返すうち、塔は巨大な塔になってしまったと大唐西域記では言っている。

法顯も「王作塔成己。小塔即自傍」といっているから、この話は四世紀はじめには普及していた。又カニシカ大塔の発掘による考古学的調査でも確認されているから、この律蔵の話はカニシカ大塔建立後といえる。カニシカ大塔はカニシカにはじまって次のフヴィジカ時代に完成しているから、律蔵のこの部分の成立は約西紀一七〇年以後とも言えよう。だから小乗の律だから大乘より早いとは言えず、大乘よりおそいとも言えよう。

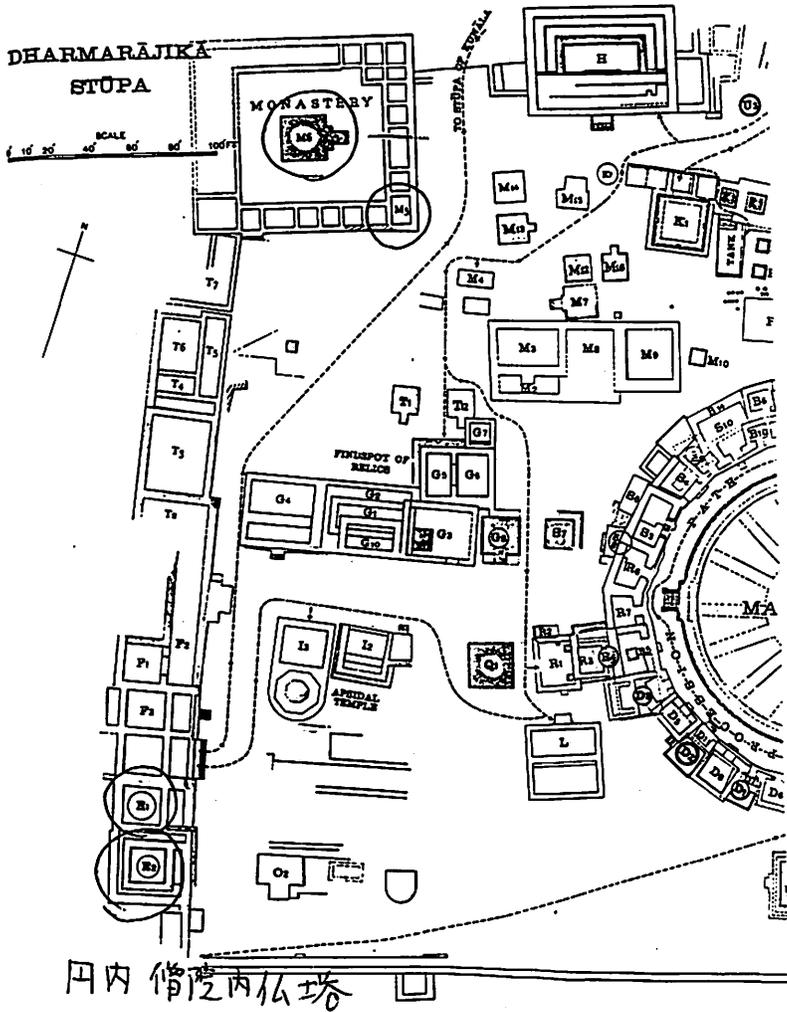
(3) 更にこのことは塔の位置変化についても言えよう。

クシャンに於ける諸宗教の大衆化(高橋)



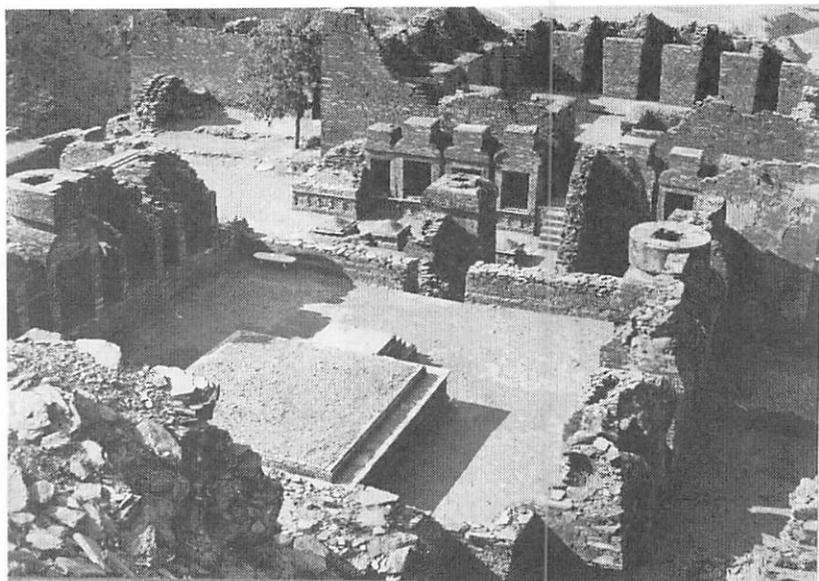
### ジャマールガリ略図

13. 僧院と塔の位置の変化



14. 僧院内仏塔 (マーシャルタキシラⅢより)

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化 (高橋)



15. タクト・イ・バーイ

起僧伽藍時。先預度好地作塔処。塔不得在南不得在  
西。応在東応在北。不得僧地侵仏地。仏地不得侵僧地。  
若塔不得近死尸林。若狗食残持来汚地。応作垣牆。応在  
西若南作僧坊。不得使僧地水流入仏地。仏地水得流入僧  
地。塔応在高頭処作。（摩訶僧祇律卷第三十三）<sup>18)</sup>

即ち、この律の文字は僧院と塔の分離、然も塔は僧院  
より高い所に作られるとある。マーシャルのタキシラに  
よると、ピツパラやダルマジカでは僧院の内に仏塔が  
祀られていたが、（写真14参照）三世紀を限度として、  
僧院外に造られて行くとしている。<sup>20)</sup>

更に、塔もカラワン（写真13参照）やギリの如く、僧  
院の一段下で、町から直接塔に詣でられ、僧院の修行生  
活をディスプレイしないように、塔は作られていたが、  
やがて、仏塔の隆盛にともない、塔が僧院より上に作ら  
れるようになった。タフト・イ・バーイ（写真15参照）  
のように塔区の方が少し高くなり、遂に13の位置図の如  
くジャマルガリのように頂上に塔が作られ、僧院は下



16. 仏陀像 カニシカー一世金貨 (2世紀)

で、各僧院の僧は山頂の塔に詣でるようになって行く。これらは石積み方法から言つて三世紀以後、更にメハサンダの主塔のように四・五世紀のストッコ全盛時代にまで及ぶに至る。

(4) 又仏像の成立後を暗示する文章まである。

吉利王為迦葉仏塔。四面起宝枝提。彫文刻鏤種種彩畫。今王亦得作枝提。有舍利者名塔。無舍利者名枝提。如仏生処得道処転法輪処般泥洹処菩薩像辟支仏窟仏脚跡。此諸枝提得安仏華蓋供養具。(傍線筆者)

即ちこの文章の中の「仏」という所に注目したい。「舍利あるを塔と名付け、舍利なきを枝提、と名付く」とあり、この舍利のない枝提、チャイトヤに「仏を安置せよ」とある。

即ち仏である舍利のない所に「仏を安置せよ」とあるからには明らかに、この「仏」とは仏像に他ならない。

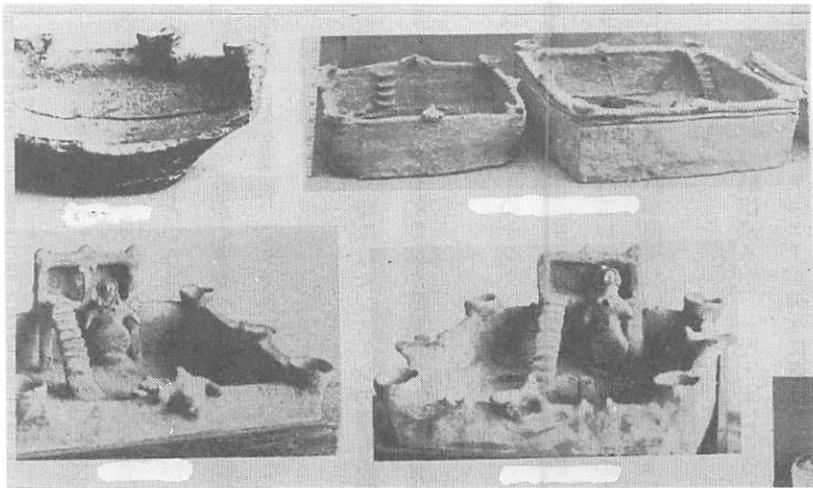
仏像の成立は一世紀、単独像の成立は二世紀のカニシカ時代といわれている（写真16参照）。なぜならカニシカコインに仏の単独像がミントされているからである。さすれば、この律蔵の話は、仏像成立以後と考えられる。こうして考えてみると、前記の如く小乗の律だから、大乘より古いというわけには行かない。特に法華経は西紀一世紀から二世紀といわれているから、釈迦多宝の二仏は律蔵の釈迦仏と迦葉仏の二仏より、大乘だからおそいということはない。むしろその逆とも言えよう。

5

マーシャルのタキシラII、四六三頁やIIIの図録篇の Plate

一三六の程から下にかけて注目すべき出土品が示されている

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化（高橋）



17. 竜神に捧げられたミニチュアの水槽（マーシャルタキシラIIIより）

クシャンに於ける諸宗教の大衆化 (高橋)

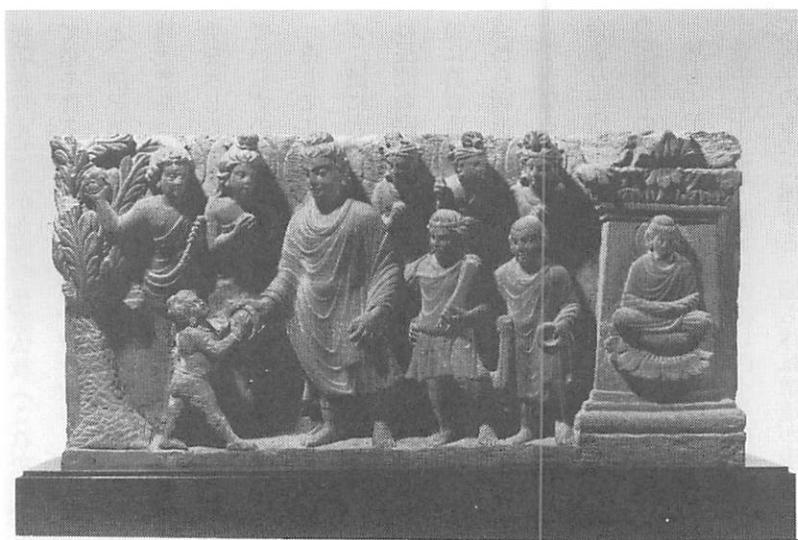
(写真17参照)。即ち粘土細工のタンク (水槽) の出土品が十数ヶのせられている。

これに対して、Dr. Ram Sharan Sharma は 'Histroy of Early India, munshiram monharial, Delhi: 1983, P.162—3に、ユニークな説明をしている。即ちクシャンの時代に、西北インドではタンクを作ることが社会的要請となった。特にモンスーンの影響の少ない所では灌漑の為である。従ってタンクを作るといふ社会生活上の要請が、宗教的功德と結びついて行った。特に竜神信仰では、竜は水に住むということから、灌漑のタンクを作ることが同時に神への奉仕ということになる。従ってタンクを作ることが一層すすめられ、人々は競ってタンクを作ることになったと記している。

筆者の体験ではパキスタンのイスラマバード以西ではモンスーンの期間も短かく、時にはモンスーンの雨も極度に少ない年もある。従って雨に恵まれない地方では、灌漑の為のタンク作りという社会的要請が同時に宗教的功德と結びついて行ったと容易に考えられる。

然し、シャルマの論文やマーシャルの写真で特に注目すべきことは、ミニチュアアのタンクが沢山出土していることである。前記マーシャルが出土品を示しているタキシラだけではなく、Hasinapur, Udaipur, Alichahtra Kausanhi, Bhita (near Allahabad) 等で数多くのミニチュアアのタンクが発掘されている。社会の福祉の為のタンク作りが宗教的に大いなる功德をもたらすと考えられていたが、然し一般大衆はこれが出来ない。イミティションの儀式用タンクで満足せざるを得なかった。この傾向は中世から現代まで続いている<sup>21</sup>。

かく述べているのは特に注目に値する。即ちお金持ちは現実の水槽を作って奉納出来るが、一般大衆はこうしたことは出来ない。そこでタキシラ出土のような手の上に乘る如き小さな泥土のミニチュアアが神々に奉げられた。こ



18. 童子供養像（筆者蔵）

れは貧しい人達にも希望を与えるという社会的要請。現実のタンクを奉納出来ない人に光明を与える傾向が、こうした土地にはあったことを物語っている。そして又、こうした傾向がクシヤンの時代であったとも言っている。

ヴィーマカドフィーセス王によってローマと同じ規格のコインが作られた程東西交易が盛んとなり、カニシカ、フヴィシカを経て強大な王国を作り、中国とローマ、インドとローマのシルクロードの主要ルートの貿易を独占したクシヤン族は、その豊かな財政で、自分の宗教のゾロアスターの巨大な神殿をスルフ・コタルに作り、統治下の領域内各地の仏教やヒンズー教の寺に塔や僧院を奉献した。ガンダーラの山々に残る仏教寺院の遺跡から如何に造塔造伽藍の事業がさかんであったことがわかる。更に地方豪族や商人達も、「資産者」として美しい奉獻塔を数多く寄附したことが、現在遺跡をめぐるとき、その富裕さと共にひしひしと感ぜられる。

然しこうした奉獻は一般大衆には出来ない。この大衆に

光明を与えたのが在野の在家仏教(これがやがて大乘として発展するのであろうが)、<sup>(27)</sup>「童子のたわむれに砂をもて塔を作る」という文章や、現在数多く出土している「童子の土饅頭供養像」の彫刻等(写真18参照)を考え合せると、前記諸律の「泥団子」の文章はこうした時代性を反映しているのではないか。これがシャルマの言うクシヤンの時代であった。造塔造像の極度に盛んだった時代、それと裏腹にそれが出来ない民衆のもどかしさ、淋しさ。これに手をさしのべ、光明を与える。これが「たとえ一句でも受持誦誦すれば」<sup>(28)</sup>「一団泥」「淨心」という物から心、もとでいらずの、無一般大衆に希望を与えて来た。

そしてこうした宗教の民衆化大衆化がクシヤンの時代であった。この社会的傾向を敏感に先取したのが在野のグループ(後に大乘と発達するのであるが)であった。いつの時代でも、例えば現代に例をとっても、時代を先どりするのは民間の宗教団体である。既成のものはそうしたものにひかれながらもと容易にとり込めないというのが実情である。特に終戦直後、雨後の荀の如く新興宗教が輩出したのも、民衆のニーズをいち早く感じた為であったろう。こうした点から類推すると、当時の新興宗教たる大乘仏教はこの時代の要請を先取りしたものであろう。

こうなると当時の既成宗教たる小乗仏教も時代の流れに案閑としてはいられなくなった。そこで前記「閻浮内の黄金より一団泥」という考え方をとり入れざるを得ない状況に追い込まれて行った。前述の根本説一切有部薬事第十二の泥団子の話のすぐ後に、「貧者の一燈」の話が続いていることでもこの間の消息が理解されよう。

然も「泥団子」の話ののっている章は律蔵としては終りの章に近い。五分律では三十卷中三十六卷、四分律では六十卷中五十二卷、摩訶僧祇律は四十卷中三十三卷、根本説一切有部毘奈耶薬事では十八卷中十二卷、いずれも律として後半のものに属する。即ち律は僧達が現実問題に当面した時、その都度、「仏の名のもとに」戒律を規定して行っ

たものだから、こうした背の高い塔・二仏・泥団子の記された章は、そうした時代の社会環境の中で、教団は如何にあるべきかを表現しているといえよう。いわば当時の社会環境と教団とのかかわりを示していると思うのがごく自然なことではあるまいか。これがクシヤンの時代、場所は西北インド。仏教内だけではなく、それぞれの宗教が、それぞれにこうした時代的要請に対応して行ったことがわかる。<sup>88)</sup>



かくてタキシラの二仏は時代的に法華経のものであっても何ら不思議ではない。よしんば小乗仏教の律威の「迦葉仏と釈迦牟尼仏」であっても、こうした宗教の大衆化の時代に触発され、又、そうした時代の風潮を先取りした法華経等大乗仏教の刺戟で出現した二仏であるとしたら、その精神は法華経の二仏と何ら別物ではない。

要は、仏の超越性を表現する背の高い塔と仏の寿命、そしてその説かれた法の無窮性を示す二仏、即ち超越性と無窮性が「己心」の中に存在するのであって、それは富者も貧者も異るところはない。こうした三位一体の構造が確立して行ったのが、クシヤンの時代であった。いわばクシヤンの時代こそ、宗教の大衆化の時代であったと言える。

〔註〕

- (1) John marshall Taxila III plate 95 b
- (2) 全集 plate 93
- (3) 全集 plate 45
- (4) 高田保氏 仏像の起源 二二五六頁
- (5) 大唐西域記 大51—8八四下
- (6) 静谷正雄 インド仏教碑銘目録一七八八

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化(高橋)

クシヤンに於ける諸宗教の大衆化(高橋)

- (7) 大2—四一六下
- (8) 大2—三〇二上
- (9) 大4—一六一上
- (10) 大22—四九七中—四九八の上
- (11) 大22—一七二下—一七三上
- (12) 大22—九五八上中
- (13) 大24—五三上中
- (14) G. Widengreen, *Les Religions de Iran* p.340
- (15) 樓神五十七号 筆者論文火と光参照
- (16) 大51—八七九下—八八〇上
- (17) 大51—八九八中
- (18) 大22—四九八上
- (19) 前掲「トーンシャル plate 45
- (20) 樓神六四号筆者 僧院から仏塔崇拜へ
- (21) marshal Taxila plate 72
- (22) 前掲 僧院から仏塔崇拜へ(八十頁)
- (23) 大22—四九七上—四九八中
- (24) 前掲 Ram Sharan Sharma, *Histrgof Early India* p162—3
- (25) 全書一六一頁—一七二頁
- (26) 前掲静谷自録 一七八六 タキシラパティカ銅板銘文等
- (27) 法華經方便品第二(大正九—八下)
- (28) 法華經法師品第十(大九—三〇下)
- (29) 根本説一切有部業事第十二(大24—五五下—五六上)
- (30) 干潟竜祥氏は本生経類の思想史的研究の三十四頁—四十九頁で諸律の完成をAD一世紀及至一・三世紀としている。